# 21st 新響

## 新交響楽団
## 第21回定期演奏会



# THE NEW SYMPHONY ORCHESTRA
## 21st Subscription Concert

新交響楽団第21回定期演奏会

指揮　芥川也寸志
Conductor　YASUSHI AKUTAGAWA
独奏　徳永二男
Violin Solo　TSUGIO TOKUNAGA

I　管弦楽組曲第3番　ニ長調……J. S. バッハ
**Suite for Orchestra No. 3 D-dur**……J. S. Bach

1. 序曲
Ouverture
2. アリア
Air
3. ガボット
Gavotte
4. ブーレー
Bourrée
5. ジーグ
Gigue

II　ヴァイオリン協奏曲　ニ長調　Op. 31……L. V. ベートーベン
**Violin Concerto D-dur Op. 61**…… L. V. Beethoven

1. アレグロ　マ　ノン　トロッポ
Allegro ma non troppo
2. ラルゲット
Largetto
3. ロンド　アレグロ
Rondo Allegro

〈休　憩〉

III　交響曲第3番　ヘ長調　Op. 90……J. ブラームス
**Symphony No. 3 F-dur Op. 90**……J. Brahms

1. アレグロ　コン　ブリオ
Allegro con brio
2. アンダンテ
Andante
3. ポコ　アレグレット
Poco Allegretto
4. アレグロ
Allegro

1971年4月18日(日)2時　4月22日(木)7時
千葉県文化会館　虎の門ホール

——音楽監督・常任指揮者——

## 芥川也寸志

Yasushi Akutagawa



1925年7月　大正文壇の巨匠竜之介の三男として東京に生れる。
1948年　東京音楽学校（現東京芸大）在学中、「交響三章」をN響で初演。カラヤンの注目をうけ欧州楽壇に紹介される。
1953年　クルト・ウェス指揮ニューヨークフィルにより、弦楽のための三楽章「トリプティク」初演。
1954年　団伊玖麿、黛敏郎とともに「三人の会」結成。
1955年　ブルーリボン映画音楽賞受賞。
1966年　第2回日ソ青年友好祭実行委員長。
ソ連、中国、欧米、インド、朝鮮、ベトナムを歴訪。
現在　日本作曲家協議会副会長、日本現代音楽協会会員。

＜作品＞交響三章、トリプティク、交響管弦楽のための音楽、交響曲第1番、エローラ交響曲、オスティナート・シンフォニコ、チェロ協奏曲。

1956年新響発足以来の常任指揮者であり、1969年音楽監督就任、1968年には合唱団“鯨”を組織するなど、アマチュア界に於る貴重な指導者でもある。

——ヴァイオリン独奏——

## 徳永二男

Tsugio Tokunaga



1946年11月　横須賀市に生れる。
5才から鷲見三郎に師事。
1958年　毎日学生コンクール小学校の部、全国1位。
1962年　桐朋学園特別高等科入学。
1965年　NHK・毎日新聞社主催音楽コンクール入賞。
1966年　東京交響楽団のコンサートマスターに就任。
1968年　文化庁海外派遣コンクール研修生としてドイツへ、1年間留学。ベルリンフィルのコンサートマスター、M. シュヴァルベに師事。69年9月帰国。

徳永二男氏は数ある日本の交響楽団の中でも、指導性、音楽性の上でその若さにもかかわらず特に傑出したコンサートマスターであるとの評判が高い。

新響とは、3年前の同じ4月、第16回定期演奏会でメンデルスゾーンの協奏曲を共演しているが、留学の成果を含めてその成長が聴きものである。

# 曲目解説

**管弦楽組曲 第二番……バッハ**

「組曲」とは今日では、相当長いバレー曲やオペラの中から、さわりの部分を抜萃して演奏会用の曲集としたものとか、或るモチーフ（発想のもととなるもの）に基いて書かれた一連の多分に描写的な小品を集めたもの等がこの名で呼ばれますが、バッハの場合はやや異った意味をもっているといって良いでしょう。

抜萃曲の場合、当然、個々に独立した曲の“寄集め”ということになります。又、始めから演奏会用に「組曲」として書かれた曲でも、ロマン派以降の曲では多くが非常に自由奔放な曲の集りで成立っていますが、バッハの4曲の「組曲」を眺めてみますと、決してそのようには書かれていないことがわかります。即ち、バッハの場合は、冒頭に必ず非常にゆっくりとしたテンポの「序奏部」をもっており、これはそのままテンポの速い「フーガ」（一つの旋律に続き同じような形のいくつかの旋律がつぎつぎと前の旋律を追かけてゆく形式の曲）への続き、再び始めのゆっくりした部分が戻ってきて相当長い「序曲」が形造られます。そしてその後には「カボット」「メヌエット」「ブーレー」「サラバンド」等の名をもった一応独立した曲と云える小品が数曲添えられて一つの曲を成しているのです。ここで一つ目立った特徴は一つの組曲中では序曲を含め全曲が一貫して同じ調で書かれていることです。これに対しロマン派以後の組曲では、各曲がてんでばらばらな調や拍子で書かれているのが普通でです。

つまり、バッハは序曲とそれに続く数曲の小曲から成立つ一まとまりの曲の形式を「組曲」名づけたのですが、後には、幾つかの曲を組合せた曲集という意味だけが残り、形式などほとんどない自由な曲集が同じ名前の「組曲」と呼ばれるようになってしまったわけです。

面白いことに、バッハの無伴奏ヴァイオリン曲集は、やはり冒頭にゆっくりした曲があり、その後に「フーガ」とか「ドブレ」などの小曲が幾つか組合されて一曲となり、やはり各楽章は同じ調で統一されていますが、バッハはこちらの方は「ソナタ」又は「パルティータ」という名で呼んでいます。この場合も、いわゆる“ソナタ形式”で書かれた後年のソナタと異りバッハがそういう名前で呼んだだけなのです。「組曲」の場合も一曲を構成しているのは幾つかの曲という、より楽章と考えた方が自然でしょう。2, 3の例外を除いて一曲一曲は独立した曲として演奏するには短かすぎるか、単調すぎるかします。

同時代のヘンデルは、ゆっくりした序をもった多楽章の合奏曲を以前からあった“合奏協奏曲”という名で呼びました。この場合同じ名でもヴィヴァルディの場合とちがって独奏部は特別に重要な働きはしていません。又、モーツアルトは、やや形は違っていますが、バッハの「組曲」にやや近い曲を「セレナーデ」「ディヴェルティメント」等の名で書いています。

バッハの「組曲第3番」は曲が作られてから約100年を経た1838年メンデルスゾーンによって再演されて世に知られるようになりましたが、メンデルスゾーンこそは外に「マタイ受難曲」等の演奏をしきりと行い、それまで見過されていたバッハの真価を世に知らしめた立役者なのです。モーツァルトやベートーヴェンさえからも見逃されていたというのは音楽史上一つの不思議の一つでしょう。

4曲の管弦楽組曲は第1番のハ長調を除いて総てニ長調で書かれていますが、一つの曲集は意識的に色々調を変えて曲を書くことの多かったバッハとして珍らしいはことです。第3番では弦に2本のオーボエ、3本のトランペットそれにティパニが加わり“管弦楽”の名にふさわしい編成になっています。

**1. 序曲**（グラーベ／ヴィヴァーチェ／グラーベ）……ゆっくりと重々しい序奏の後に軽快なフーガが続き、その後に再びゆっくりした部分が帰って結ばれ、一種の三部形式を成している。
フーガの部分はバッハのものとしては比較的単純だが管楽器とティンパニが効果的に用いられている。

**2. アリア**……ヴァイオリンの独奏曲「G線上のアリア」の原曲として余りにも名高い。原曲には使用弦の指定は勿論なくオクターヴ以上高い音域で奏される。「アリア」とはこの場合単に抒情的な曲、というような意味で、オペラの場合の「詠唱」とは少し違う。

**3. ガヴォット**……ガヴットは2拍子の舞曲。3拍子のメヌエットと共にフランス舞曲の代表だがガヴォットの方は交響曲やソナタには採り入れられていない。この組曲中のものは簡潔だが、まこと典雅な雰囲気をもった名品である。

**4. ブーレ**……ブーレはフランス西部地方の民踊で、速い4拍子又は2拍子なのでガボットと似ている。本曲では後半のシンペーションの音型が特徴的である。

**5. ジーグ**……ジーグも元来はフランス或いはイタリアの旧い舞曲。3連音を基にした活発なリズムなので、前二曲のやや貴族的な感じに対し、よい素朴で農民の踊りを彷彿とさせる。

# 曲目解説

**ヴァイオリン協奏曲 ニ長調……ベートーヴェン**

ベートーヴェンのこの協奏曲は数あるヴァイオリン協奏曲の中でも抜きん出た傑作であるばかりか、あらゆるヴァイオリン曲の中でも特別の名曲と云えるでしょう。

メンデルスゾーン、ブラームス、チャイコフスキーその他の作曲家達によって他にも優れた協奏曲は数多く作られていますが、多くのヴァイオリン協奏曲が（協奏曲という曲の性質から当然ではありますが）様々の奏法を駆使してヴァイオリンを輝やかしく唱わせ、独奏者の技巧を華やかに聴かせようとする事に重きがおかれているのに対し、ベートーヴェンの協奏曲にはいささかも特殊奏法や演奏技術の誇張がないのみか、独奏部はオーケストラと混然一体となって終始深い感動に満ちており、あたかもベートーヴェンがヴァイオリンという楽器を借りて私達に何かを語りかけようとしているかのようです。

この曲が書上げられたのは作曲者のもっとも油の乗った36才の頃で、少し前には「熱情ソナタ」歌劇「フィデリオ」「ラズモフスキー四重奏曲」等の傑作が相ついで書上げられています。

初演はクレメントという当時の名ヴァイオリニストによって行われましたが、これ程の名曲がその当時はとり立てて取柄の無い曲として、特に注目を集めることなく忘れられてしまったようです。それは一つには独奏部が技巧的には余り華やかでないということもあったでしょうが、この曲は本番間際になっても仲々書上がらず、クレメントはとうとう本番当日初見で演奏せねばならなかったと云い、演奏の出来が悪かったのも一因のようです。

この曲の真価が認められるようになったのは、19世紀後半の大ヴァイオリニストであるヨゼフ・ヨアヒムが何度も演奏して世に広めたからだと云われています。ヨアヒムがどれ程輝やかしく誇り高い奏者であったかは、シューマン及びドボルザークから“最大の敬意”をもって捧げられたコンチェルトを“充分音楽的でない”という理由から生涯一度も演奏しなかった、というエピソードからも窺がえます。彼はコンチェルトは結局ベートーヴェンのと親友のブラームスのもの二曲しか演奏しなかったとも言い伝えられます。

ところでベートーヴェンが素晴しいピアニストであったことはよく知られていますが、ヴァイオリンの方はどうだったかと申しますと、オーケストラでヴィオラを弾いてお金をもらっていたこともある位で、この方もかなり弾けたのです。子供の頃、後に終生の友となったシュテファン・フォン・ブロイニングという人と一緒にリースという先生からヴァイオリンを習った事があるのですが、ブロイニングの方が早く上達してしまったと云います。作曲においてはもちろん、ピアノ演奏でも最高の才能を自負していたベートーヴェンにとってこれは癪（しゃく）の種だったらしく、後年“私はもともとヴァイオリンは好きではなかったのだ”と語ったとか云いますが、ベートーヴェンは人間的な面からも、天才にありがちな幾つかの欠点を除けば、最も高邁（こうまい）な精神の持主でしたから、ライバルの腕前にケチをつけたりするようなことはせず、逆にこの協奏曲を、ブロイニングに献呈しているのですから皮肉です。献呈したのはきっと昔一緒にヴァイオリンを習ったことを想い出したに違いありません。ベートーヴェンは更にピアノの上手なブロイニング夫人のためには、この曲をピアノ用の協奏曲に編曲して献げています。

ベートーヴェンが本当は決してヴァイオリンが嫌いでなかったことはこの曲の外にもう一曲協奏曲を書きかけていた事や、ヴァイオリンソナタを10曲も書いている事からも窺がえます。晩年、彼のピアノの上には何時も裸のままのヴァイオリンが置いてあって、彼はよくそれを手にとって弾いていたそうです。しかし耳の聴えない彼にとって調弦は必要でなく、彼の心の中では美しい音楽が流れていたのでしょうが、出ている音はとても音楽といえたものではなく、周囲の人達の哀れをさそったと伝えられています。

**第一楽章　アレグロ・マ・ノントロッポ**……ティンパニーによる初めのトン・トン・トン・トンのリズムは一楽章を通じて何度も反復される。これは翌年作られた“運命”の一楽章が殆んどンタタタターのリズムのみによって構成されている事を想い起させる。独奏ヴァイオリンの出は“皇帝”コンチェルトと同様カデンツァ風だが、楽章の終りには別に独立したカデンツァの部分をもっている。

**第二楽章　ラルゲット**……伴奏と独奏の高音部の音色が素晴しい対比をなしている。独奏部は途中にかなり自由な速さで演奏し得る音階的な装飾音を伴っているのが印象的である。

**第三楽章　ロンド**……当時の協奏曲の終楽章の典形である2拍子系統のリズムによるロンド。前楽章と打って変って軽快になり、ピッチカートや重音奏法なども効果的に使われている。第一楽章のより普通短いがこの楽章も独立したカデンツァ部をもっている。

# 曲目解説

**交響曲第2番　ヘ長調……ブラームス**

ブラームスの交響曲4曲は彼が43才の頃から約10年の間に総て完成させられています。シューマンに才能を認められたのは20才の頃ですから、作曲者は随分永い間交響曲を敬遠していたことになります。しかし実際には、22才頃から既に第一交響曲の構想を抱いていたと云いますから、実に20年余もそれを心中にあたためていた事になります。彼がこの様に永い間交響曲への着手をためらったのはベートーヴェンの交響曲に対する意識があったためでしょう。大作曲家の中にもベートーヴェンを最大の作曲家として敬っていた人は少なくありませんが、時にシューベルトやブラームスは神様のような存在と感じていたようです。

ブラームスの作風の最大の特徴は、ワーグナーの「楽劇」やリストの「交響詩」で象徴されるような、形式にはとらわれず、劇的効果や音響的効果を重視するような当時のロマン的、或いは新ロマン的傾向に真向うから反対して、きちんとした形式に従い、表面的な華やかさよりも地味でも充実した内容をもった作品を至上としたことでしょう。この彼にとって大規模で最も美しい形式をもった「交響曲」は理想の音楽であった筈ですが、かえってそれ故に、又ベートーヴェンが大成してしまった音楽であるだけに、よほど充実した作品が作れるのでなければ手を染める気持になれなかったのでしょう。

交響曲においても“ベートーヴェンに帰れ”が彼のモットーに違いなかった筈です。事実、彼の音形式、楽器の扱い方等当時の最先端の音楽よりベートーヴェンのそれに近いと云えるでしょう。しかし、彼の音楽のあらゆる要素に対し本当に大きな影響を与えているのはベートーヴェンよりも、恩師であったシューマンの音楽であると云えます。

彼はシューマンに対しても深い尊敬の念を抱いていましたが、同時代の人であるシューマンは彼にとってベートーヴェンのような神様のような存在ではなく、尊敬と供に或いは追越し得る存在として競争心も抱いていたことでしょう。実際、ブラームスの作品は、管弦楽に限らず、楽想や響きの豊かさにおいて遙かにシューマンの作品を凌いでおりますが、もしもシューマンの音楽という土台がなかったなら、ブラームスもこれ程優れた作品は書けなかったか、或いはかなり違った傾向の作品を残していたかもしれません。結局二人の音楽の才能はやや異質のものであって、そのままどちらが優れているかと比べることはできないもののように思えます。シューマンはブラームスが知り会えてから僅か3年で故くなっていますが、ブラームスは自分を世に認めさせてもらった恩を一生忘れず、シューマンが故くなってからはクララへの思慕もかえって穏やかな友情に変り、一生シューマン家への協力と友誼を欠かさなかったと伝えられます。ブラームスは構想を捻りに捻って一番の交響曲を書き上げた後は、憑き物がとれたように、翌年第二番を僅か3ヶ月で書き上げ、それから6年程間を置いて、第三番も4ヶ月余りの間に書き上げました。

この交響曲は4曲中最も短く、他の3曲程際立った特徴をもっておりませんが、厚みのある音色、寸分のすきもない音楽の構成、又適度にとり入れられたロマン的情緒等、名作と呼ぶに足る充分な要素を備えています。「英雄」という副題はこの曲を初演した、当時の高名な指揮者ハンス・リヒターが曲の堂々とした雰囲気から名付けたものです。又、ドボルザークはこの曲に非常な感動を受け、それが彼の7番の交響曲（ほとんど演奏されない。彼の8番と感じのよく似た曲）を作る元となったと云われます。

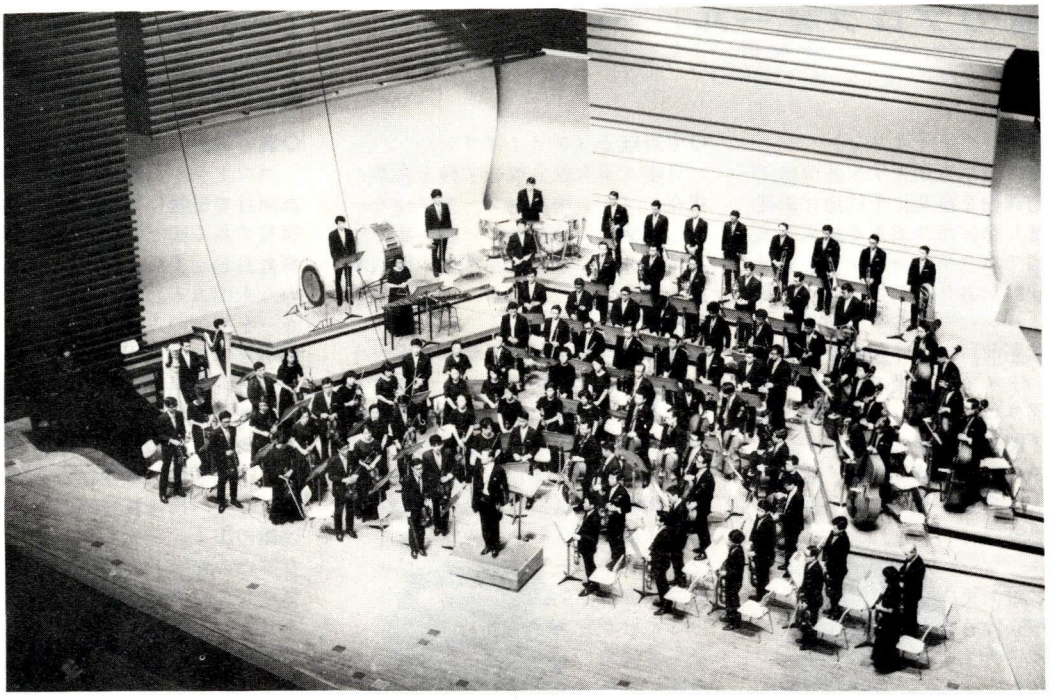
**第一楽章アレグロ・コン・ブリオ**……冒頭のF－A♭－Fの動きが全曲を通じてのモットーに使われている。これはブラームス自身のモットーである“Frei aber froh”（自由にしかし楽しく）によっていると云われる。（小文字のb「ビー」が♭「フラット」と見故されている事に御注意）この動きはヘ短調の響きをもっているのでモットーの意味に反して暗いが、すぐヘ長調の主題へと受けつがれる。つまり、このモットーが曲の調性まで決定している事になる。文字の音名への転用はシューマンも好んで行っており特に“アベッグ変奏曲”において名高い。

**第二楽章　アンダンテ**……ブラームスの緩徐楽章にしては簡素な美しさを備えている。冒頭の木管のメロディーも素朴で平和な気分に満ちている。

**第三楽章　ポコ・アレグレット**……数年前、フランソワーズ・サガンの小説を映画化した“ブラームスはお好き”のバックミュージックとして使われ有名になった。やや感傷的過ぎるチェロのテーマも対旋律により見事に救われている。中間部はものうい美しさをたたえている。

**第四楽章　アレグロ**……弦の幽やかなユニゾンに始まるが全体としては最も高まった気分で書かれている。時おり顔を出すロマン的なメロディーも気分を鎮める働きはしない。最後に一楽章の主題が回想され、これは限りない安らぎと憧れの気分をもたらしてくれる。

（Vla　菱沼佳史）



# 新　交　響　楽　団

新交響楽団、新響は名前こそN響の前身の名前と同じですが、純然たるアマチュアのオーケストラで、サラリーマン、学生、主婦など音楽を職業としない 100名の団員から成り、月々 400円の団費と演奏会の収入による独立採算で運営されています。

42年秋のソ連旅行、44年秋の沖縄九州旅行という華やかな活動がある反面、実質的には何の拘束もない任意団体で、週1回2時間半の練習では、全員が常に出席という訳にも行きませんから、極端に言えば常に解体の危機に瀕しています。私達を結びつけるものは一諸にアンサンブルを創るという一点にしかありません。2～3回の練習で演奏会をもつというプロのオーケストラにはできないような、すみずみまで奏きこんだ演奏をモットーとし、毎週の練習自体をも一つの目的とする緊張と充実が団員の共通目標になっています。

新響のもう一つの目的は、オーケストラを団員の自己満足としてでなく、なるべく沢山の人々に演奏を聴いてもらいたいという、演奏団体としての活動です。

そのために、年間の活動計画を早めに立てて、外部からの依頼に応じられる体制をとること、定期演奏会を東京と近県の2回開くこと、東京都アマチュアオーケストラ連盟の設立など積極的な対外活動も併せて行っています。

本日以降の活動は、鯨のコンサートへの出演、アッと驚くサマーコンサート、10月28日には第22回定期でアマチュアとしては初のマーラーを演奏し、12月には恒例の第九とメサイアを演奏することになっています。

## 最近の主な活動

**1970年**

**4月13日　第19回定期演奏会**　日比谷公会堂
交響詩「前奏曲」＝リスト、交響曲第101番「時計」＝ハイドン、組曲「展覧会の絵」＝ムソルグスキー＝ラベル編曲

**7月1日　合唱団鯨演奏会に出演**　渋谷公会堂
オラトリオ「天地創造」＝ハイドン

**8月20日　サマーコンサート**　東京文化会館
軽騎兵序曲＝ズッペ、天国と地獄序曲＝オッフェンバッハ、ウィンザーの陽気な女房たち序曲＝ニコライ、ハンガリア狂詩曲第2番＝リスト、組曲水上の音楽＝ヘンデル、組曲大峡谷＝グロフェ

**11月4日　第20回定期演奏会**　共立講堂
序曲「後宮よりの逃走」＝モーツアルト、交響曲第5番＝シューベルト、交響曲第4番＝チャイコフスキー
客演指揮：外山雄三

**客演指揮：外山雄三**

**12月21，23日　第九特別演奏会**　共立講堂
弦楽のためのアダージォ＝バーバー、交響曲第9番「合唱付」＝ベートーベン　合唱：合唱団“鯨”
独唱：佐野順子、菊池洋子、金谷良三、田島好一

**1971年**

**1月15日　足立区成人式祝典演奏会**　足立区文化会館
交響曲第8番「未完成」＝シューベルト、交響曲第5番「運命」＝ベートーベン
（指揮は特記以外全て芥川也寸志）

演奏会予告

## 第九回合唱団“鯨”演奏会

**日　時**　6月1日（火）午後7時開演
**会　場**　渋谷公会堂
**曲　目**　弦楽のためのレクイエム……武満　徹
レクイエム　作品48……フォーレ
レクイエム　ニ短調　K.626……モツアルト
**演　奏**　指揮：芥川也寸志、小林研一郎　管弦楽：新交響楽団　独唱：常森寿子、金谷良三　他
**入場料**　S：800円　A：600円　B（自由席）：400円　都内プレイガイドにて前売中

## ’71新響サマーコンサート

＜第1部＞
タイケ……行進曲「旧友」
メンデルスゾーン……結婚行進曲
シューベルト……軍隊行進曲
チャイコフスキー……
……「くるみ割り人形」から「行進曲」
エルガー……行進曲「威風堂々」

＜第2部＞
ブリッテン……「青少年のための管弦楽入門」
ナレーター：芥川也寸志

＜第3部＞
リムスキー・コルサコフ……交響組曲「シェーラザーデ」
（曲目には多少の変更があるかもしれません）

**日　時**　8月10日(火)　午後7時　　**指　揮**　芥川也寸志、小林研一郎
**会　場**　東京文化会館大ホール　　**入場料**　S：600円（ペアー券1000円）　A：500円（ペアー券800円）　B：400円（ペアー券600円）

＜**お詫び**＞新響マーク募集の発表が遅れております。8月10日のサマーコンサートで発表しますのでしばらくお待ちを！

## 新響の団員を募集しています

メンバー表を見てもわかるとおり、新響団員は、サラリーマン、主婦、学生などで構成され、音楽を職業としている者はおりません。
どなたでも、簡単なテストを受けて団員になることができます。お気軽に下記へ電話下さい。

**定期練習**　毎週木曜日、文化会館リハーサル室
**問合せ先**　〒160　新宿区須賀町14大湊ビル4F

**新交響楽団**　TEL.（357）5255
――但し、平日午後のみ――

## 新響・登録会員募集中

＜新響の演奏を聴いてください＞

- 新響の演奏会の御案内を毎回お送りします。
- 入場券は一割引させて頂きます。
- 会員証を提示して頂けばプログラムは無料でさしあげます。

申込みは、〒160　新宿区須賀町14　大湊ビル　新交響楽団宛　ハガキにて　郵便番号、住所、氏名（フリガナ）、生年月日、ご職業、もしありましたらご所属の音楽団体、楽器をやられる方は楽器名を付記してください。